

論文

バングラデシュにおける開発援助と伝統工芸

—ジャムダニの生産・流通を中心に—

岡田 菜穂子

1. はじめに
2. バングラデシュにおける開発援助と布
 - 1) バングラデシュにおける開発援助
 - 2) 伝統の表象としての布
 - 3) 商品としての布、ノクシ・カンタの誕生
 - 4) 援助対象としてのジャムダニ職人
3. ジャムダニの歴史と生産地の概要
 - 1) ジャムダニとその歴史
 - 2) ジャムダニ村の概要
 - 3) K村の概要
4. ジャムダニの生産・流通過程
 - 1) ジャムダニの生産工程
 - 2) 村の機織り工房
 - 3) ジャムダニの流通過程
5. ジャムダニの生産・流通の特徴
6. 小結 —ジャムダニの生産・流通における NGO とマハジャンの関係—

1. はじめに

現在バングラデシュでは、多くの NGO (Non-Governmental Organization) が活動し、様々な開発援助プロジェクトが進められている。そのプロジェクトの一つが手工芸の生産と販売に関わるものである。手工芸プロジェクトは、貧しい生産者の生活向上を目指しており、手工芸品の生産を促すと同時に国内外の市場を視野に入れて製品の市場拡大を行っている。NGO の経営する販売店において、数ある布製品の中でもバングラデシュの伝統として紹介されるのは、手織り物であるジャムダニ (jamdani)¹ や刺し子の布ノクシ・カンタ (nakshi kantha) に代表される手工芸品である。

本稿では、バングラデシュで進められている開発援助活動のうち、大規模 NGO と政府機関 BSCIC (ピーシック : Bangladesh Small and Cottage Industrial Corporation、以下 BSCIC)² の活動を挙げ、これらと布生産者のネットワークの関係を検討する。NGO や BSCIC は、貧困層に属する生産者への経済的援助のために、活動の一環として布生産者のネットワークを管理しようとしている。NGO はノクシ・カンタの商品化のために、組織だった生産システムを確立した。ノクシ・カンタの場合は、NGO が生産者へ材料を提供し、製品を買い取り、販売している。ところがジャムダニの場合は、NGO や BSCIC が生産者のネットワークに踏み込めていない。援助活動を行う NGO 側と援助対象とされる機織り職人が接する機会は非常に少ないのである。両者が直接接する機会は少ないのはなぜなのか、またそれでもなお、NGO や BSCIC とジャムダニ生産との繋がりを成り立たせる仕組みはどういったものなのだろうか。そこで浮かび上がってくるのが、両者をつなぐ役目を担うマハジャン (mahajan) の存在である。マハジャンとは、仲介者 (middle man) あるいは高利貸し (moneylender) を担う者を指す。サリー一店や NGO の経営する販売店などの販売の場に製品を持ち込むのが、このマハジャンである。

本稿では、ジャムダニの生産と流通におけるマハジャンの役割に焦点を当て、大規模 NGO と BSCIC の活動にマハジャンがどう関わっているのか、ジャムダニの生産においてマハジャンと機織り職人がどのような繋がりを持っているのかを明らかにする。そして、マハジャンと NGO は相互依存の関

係にあり、この関係が NGO とジャムダニ生産との繋がりを支えていることを説明する³⁾。また本稿では、ジャムダニに関わる人々の繋がりについて、限られた機織り技術を持つコミュニティとしての側面にのみ着目するのではなく、流通までを視野に入れることで、援助国を意識する NGO の活動に代表されるような、外国市場との繋がりを見ようとしている。この研究は、グローバルな市場を支えるローカルな生産者ネットワークとして、機織り生産の組織を理解する試みでもある。

以下では、まずバングラデシュにおける NGO の位置づけと、手工芸品に関する開発援助活動の内容を概観する。その際、ジャムダニと同様にバングラデシュの伝統的な手工芸品として販売、展示されているノクシ・カンタの例を挙げる。先述したように、ノクシ・カンタは刺し子の刺繍が施された布で、NGO がその商品化に貢献したことで知られている。このノクシ・カンタの生産と流通の過程を紹介し、次に、実際のジャムダニ生産の場に移して、具体的なジャムダニの生産と流通の仕組みについて述べる。

2. バングラデシュにおける開発援助と布

本章では、バングラデシュにおいて NGO 販売店で手工芸品が売られることの意味についてまとめる。まず、バングラデシュにおける開発援助の歴史と現在の NGO の位置づけについて概観し、NGO の経営する販売店で売られたり、展示されたりすることで付与される布の意味について触れる。そして援助すべき対象としての機織り職人像について述べることとする。

1) バングラデシュにおける開発援助

現在バングラデシュでは、多くの開発援助活動が進められおり、その活動内容と援助対象は多岐に渡っている。バングラデシュにおいて外国援助が導入され始めたのは、1950年代半ば、東パキスタン時代と言われている(村山 1998: 8)。バングラデシュで開発援助活動が活発化したのは、とりわけ 1970 年の自然災害と 1971 年のパキスタンとの独立戦争以降である。国家再建のために国際機関や各国政府から ODA が導入され(長田 1998: 29)、外国資本の NGO がバングラデシュにおいて次々と援助活動を開始し、多くのバン

グラデシュ人による NGO (=現地 NGO) も組織された (下沢 1998 : 56)。NGO の数は年々増加しており、1995 年の時点で政府に登録されている NGO だけでも、バングラデシュの現地 NGO が 882 団体、外国 NGO が 132 団体で (下沢 1998 : 64)、現在では現地 NGO 数が 1400 以上にのぼっている。また登録外の NGO も多数あると考えられる。

NGO の活動内容は独立当初その大半が救援活動を目的としていたが、その後は開発プロジェクトへと転換してゆく (下沢 1998 : 57)。現在展開されているプロジェクトでは、マイクロクレジット⁴が有名である。その他に公立学校に代わって NGO が行うノンフォーマル教育、生活衛星のためのトイレやポンプの設置、そして貧困層を対象とした手工芸品生産と販売などがある。

NGO の援助体制に対する問題として、外国資金への依存が高いこと、NGO 間の連携が希薄であること、援助対象の意識改革が充分になされないことなどが指摘されている (下沢 1998 : 72-74)。同時に、NGO が自らのために利益追求しているという批判がある。例えば、バングラデシュ最大の現地 NGO と言われるブラック (BRAC : Bangladesh Rural Advancement Committee) は、2001 年度の年間予算約 68 億タカ (1 タカ≒約 2.2 円)、スタッフ 28000 名を抱える大規模 NGO である⁵ (下沢 2004 : 268)。ブラックは、様々な開発援助活動を展開する一方で、銀行や大学などの運営も行っており、もはやブラックは企業化したという声も上がっている。しかし同時に、雇用機会が少ないバングラデシュにおいて、NGO は良い就職先でもある。特に大規模 NGO の賃金は比較的安定しており、スタッフの中にはエリート層も含まれることから、企業化のみならずブランド化されていると言える。

2) 伝統の表象としての布

バングラデシュの首都ダッカ市内にある大規模 NGO が経営する販売店に並ぶのは、ジュート製品、陶器、革製品、そしてジャムダニやノクシ・カンタなどの布製品である。これらの商品はマーケットで買うより高値であるが、値段が安定していること、比較的質が良いことなどから、多くの人が買い求めている。また、外国人を中心に、お土産品としても人気がある。

例えば、ブラックの販売店アーロン (Aarong) やクムディニ (Kumudini

welfare trust of Bengal (BD) LTD.) の経営するクムディニ・ハンディクラフト (Kumudani Handicraft) には、マーケットと比べて洗練された雰囲気がある。これらの販売店を経営する NGO は大規模なものである。知名度の高い大規模 NGO によって伝統や歴史という言葉とともに販売されることで、ジャムダニやノクシ・カンタはバングラデシュの伝統的手工芸品としての地位を確実なものにしている。

ジャムダニとノクシ・カンタが肩を並べるのは販売の場だけではない。筆者のバングラデシュ滞在中に、ダッカのダンモンディーで行われた“textile traditions of Bangladesh”⁶において展示されたのは、ノクシ・カンタ、ジャムダニ、少数民族の手織り布などであった。また、バングラデシュの手工芸品を紹介する図版やガイドブックなどでは、始めにノクシ・カンタが大きく取り上げられ、次にジャムダニが続く傾向にある。これらの場面で強調されるのは、ノクシ・カンタやジャムダニの歴史性や伝統性である。特にそれぞれの手仕事の技術が、バングラデシュの伝統と結び付けて紹介されている。そして、生産者の経済的困難な状況が付け加えられる。これは、NGO の店頭やオフィスで配られる簡単な説明書きにも同様に見られることである。

これら販売、展示の場におけるジャムダニとノクシ・カンタのそれぞれの特徴として、ジャムダニが高級サリーであるのに対し、ノクシ・カンタは価格と用途に幅があるということが言える。生産者は、ノクシ・カンタが農村女性であるのに対し、ジャムダニは機織り職人とされている⁷。また、全国的に広がりを見せるノクシ・カンタに比べて、ジャムダニの生産地は比較的限定された地域であると紹介される。これらの特徴を大まかにまとめたのが以下の表である。

	価格	用途	イメージ	生産者	生産地
ジャムダニ	高級品	サリーが主	艶やか	職人 (織る)	ダッカ 近郊の村
ノクシ・ カンタ	価格に幅	壁掛け、小物、サリー (刺繍)	素朴さ	農村女性 (作る)	バングラ デシュの 農村部

ガイドブックや説明書き、図版などでの紹介では、生産者や生産地など生産についての説明はあっても、製品がどういった過程で生産・流通されているのかについては説明されていない。

ノクシ・カンタの場合、その生産と流通には NGO が大きく関わっている。そもそもノクシ・カンタは、NGO のプロジェクトの一環として商品化された布である。では、NGO はどのような経緯で、ノクシ・カンタ生産に携わるようになったのであろうか。次にノクシ・カンタの事例を紹介し、その生産と流通の過程をまとめる。

3) 商品としての布、ノクシ・カンタの誕生

ノクシ・カンタ⁸は刺し子の布である。重ねた布の上に花や人や動物など、様々な模様が刺し子で刺繍されている。ノクシ・カンタは、壁掛けやベットカバーとしてだけでなく、その刺し子技術を施した小物やサリーなどが商品として店頭に並ぶ。現在、ノクシ・カンタの生産は全国的な広がりを見せている。

ノクシ・カンタについては、いくつかまとめた文献があるものの、その大半は歴史や芸術品としての側面を紹介するものである。本稿では、生産工程やその仕組みについて言及する五十嵐の論文を主に取り上げ、ノクシ・カンタが誕生した歴史的経緯と、生産・流通についてまとめる。以下は、五十嵐の論文および著作（五十嵐 2000、2002、2004）を紹介するかたちで筆者がまとめたものである。

①NGO によるカンタの商品化の歴史

五十嵐は、カンタ (*kantha*) とノクシ・カンタ (*nakshi kantha*) を区別して、カンタが商品化されたものをノクシ・カンタとして定義⁹、バングラデシュにおける独立運動の一端としての民俗芸術復興の流れと、開発援助の普及という、歴史的経緯の中にノクシ・カンタを位置づけている（五十嵐 2000、2002、2004）。

カンタは、もともと売買目的ではなく家庭内で使用するために、女性が作るものである。使い古した布を重ねて縫い合わせ、薄い掛け布団として使ったり、デザインを刺繍して娘や親戚へ贈るものであった。

カンタが芸術品として捉えられるようになったのは、イギリス植民地からのインド・パキスタンの分離独立、続くパキスタン時代の統治体制への抵抗という、バングラデシュの歴史の中でであった。パキスタン時代、東パキスタン（現バングラデシュ）ではエリート層を中心に、民芸復興運動がおこる。この時民俗芸術は、ナショナル・アイデンティティに繋がる、バングラデシュらしさを示す表象の一つとされた。こうした流れの中で、カンタを芸術品として維持する動きがあった。

芸術品として注目されるようになったカンタを、商品化したのは NGO であった。五十嵐は、NGO のプロジェクトの一環として、カンタが商品価値のあるノクシ・カンタへと転換してゆく過程を説明している。

近年バングラデシュにおいて展開されてきた NGO のプロジェクトの一つが、農村女性を対象として、女性の経済的環境と社会的立場の向上を目指すものである。このような NGO の活動の一環として、女性たちに製作技術を伝え、賃金を支払って組織立った生産を行うようになったのがノクシ・カンタである。こうしてノクシ・カンタの生産は、1980 年代半ば以降、バングラデシュにおいて全国的に広がりを見せ、現在に至っている。

五十嵐は、この時 NGO が注目したのは、カンタの民俗芸術性やナショナル・アイデンティティとしての意味ではなく、その商品価値であると指摘する。つまり、カンタは、家庭の布からバングラデシュの民俗芸術としての布へと、新たな意味づけをされ、NGO が活動に取り込む段階では商品価値を持つ布として、そして販売の場ではバングラデシュの伝統的布としての側面が注目されてきたのである。

②ノクシ・カンタの生産・流通過程

では、具体的にノクシ・カンタは、どのような経路を経て、生産者である農村女性の手から販売の場へ運ばれるのであろうか。五十嵐は、ジョソール県でのフィールドワークから、NGO バチテ・シカ (Banchte Shekha) ¹⁰の手がけるノクシ・カンタの生産と流通の仕組みをまとめている。以下では、五十嵐の提示する事例 (五十嵐 2002) より、ノクシ・カンタの生産と流通の過程について紹介する。

ジョソールは、ノクシ・カンタ生産が盛んな地域の一つである。バチテ・

シカは、ジョソールを中心に活動する小規模 NGO で、農村に暮らす貧困女性たちの経済的・社会的環境改善のために、手工芸品の生産・販売プロジェクトとしてノクシ・カンタの生産と販売を手がけている。本部はジョソール市内にあり、8つの地方支部を抱えている。ノクシ・カンタ製作に関わる農村女性は年間約 300 名であるという。

ノクシ・カンタは、ダッカにある大規模 NGO が、デザインと材料（糸、布）を提供するかたちで小規模 NGO に製作を依頼し、製品の最終検査を行うという手順で生産・販売されている。このような NGO が主導するノクシ・カンタの生産から販売までの仕組みを、五十嵐は「パッケージ型商品生産システム」（五十嵐 2002：78）と呼んでいる。

この生産と販売までの流れを、生産と流通に分けて見てみる。ノクシ・カンタの生産を担うのは、女性たちである。彼女たちは、一年間の研修をうけ、習得した能力によってどの作業に関わるのかが決められる。その後は、最寄の手工芸センターに通ってノクシ・カンタづくりに関わるか、自宅で作業をしてできあがったものをセンターに持ってくる。女性たちは NGO の指示どおりにノクシ・カンタを作り、賃金を得ている。

生産管理と流通を担うのは、バチテ・シカの職員である。バチテ・シカの本部では、手工芸品部門部長、デザイナー、本部刺繍指導担当、全体管理担当が働いている。中でも全体管理担当者は、本部と地方の連携をはかり、ノクシ・カンタの受注から納品、販売までと全体指導などを担う、全工程を把握する人物である。

小規模 NGO の全体管理者と生産を行う女性の代表が注文を受け、できあがった製品を運びこむ先が大規模 NGO である。バチテ・シカは、二つの大規模 NGO、ブラック (BRAC) とクムディニ (Kumudini) との関係の中でノクシ・カンタ生産を進めている。二つの大規模 NGO のうち、五十嵐が取り上げるクムディニでは、自ら布の仕入れや、織りや染色などの製作と、デザインの企画を行っている。

バチテ・シカの全体管理担当者と、生産者の代表である刺繍製作代表者の女性は、発注どおりに作り上げたノクシ・カンタをダッカのクムディニ納品部まで運ぶ。納品部では、繰り返し製品の質を検査する。そして再び「デザ

イン・布・糸をひとまとめにしたパッケージ」を村へ持ち帰る(五十嵐 2002: 77)。このように、決められた材料とデザインは、大規模 NGO から地方の小規模 NGO を介して生産者である農村女性へと渡り、製品は逆の方向をたどって販売の場へと持ち込まれる。

ここでは、ノクシ・カンタ生産が NGO によって組織化された背景と、実際の生産・流通の仕組みについて述べた。NGO のプロジェクトでは、農村部の貧困層の中でも特に女性を対象として、その経済的地位の向上を目指す活動が展開されている。その方法の一つとして確立されたのがノクシ・カンタの生産と販売のプロジェクトであった。では、ジャムダニの生産についてはどうであろうか。次に、ジャムダニの職人が援助対象とされる根拠と、ここで強調される職人像について検討する。

4) 援助対象としてのジャムダニ職人

NGO は、ジャムダニをバングラデシュの伝統、歴史、文化、遺産という言葉を使ってアピールする傾向にある。そこで同時に注目されるのが、伝統技術の維持者としての機織り職人である。大規模 NGO や BSCIC の活動において強調されるのは、もともとあったものとしての技術の伝統や、受け継がれる染織技術の歴史性、自国バングラデシュの遺産としての織物であり、これらを保持する必要性である。いずれの場合も、ジャムダニの染織技術が特別視され、伝統技術の保持者としての機織り職人の存在がクローズアップされる。NGO の店頭で配布される説明書きなどで見られる「シルピー(芸術家)」や「artist」といった表現は、この点を良く示している。またジャムダニの機織り職人は、低賃金で働く労働者でもある。機織り職人たちの貧困という経済的環境も、活動の根拠となっている。

大規模 NGO や BSCIC のジャムダニに関する活動は、ジャムダニ織りの技術保持と、職人の経済的環境の改善を目的とし、そのためにジャムダニ市場を広げることを目指している。NGO の具体的な活動として、大規模 NGO ブラックやクムディニではダッカの販売店においてジャムダニの販売や展示を行っている。

一方、BSCIC はジャムダニ織りの技術を保持しつつ新しいデザインを取り

入れて、ジャムダニの市場価値の可能性を広げることを試みている。BSCIC が進めているプロジェクトでは、整備された区画にジャムダニの工房を集め、できあがったジャムダニを BSCIC が全て買い取り、主にマハジャンを対象に販売するという計画である¹¹。このプロジェクトは、高級品としてジャムダニを販売の現場に売り出すマハジャンと、生活するためにジャムダニを織る職人との関係における、現金収入程度の格差の改善を目指している。BSCIC は、機織り職人たちの多くはマハジャンのもとで働いており、彼らの現金収入は、全てマハジャンに頼っていることを前提としてこのプロジェクトを進めていると言える。またこのプロジェクト・エリアには、水道、電気、ガスが供給される予定であるが、これは、機織り職人たちの生活環境を改善するという狙いからである。

このように、NGO や BSCIC が援助対象としているのは機織り職人である。しかし実際に NGO や BSCIC が直接関わるのはマハジャンである。これは、機織り職人の多くはマハジャンが提供する環境の中で働いており、実際に NGO や BSCIC が職人と直接繋がる機会が少ないためである。

また、かつてラジャ（王）への献上品であったことと、他のサリーに比べて一枚を織り上げるのに多くの日数がかかるということは、ジャムダニの高級感を演出しているが、実際、ジャムダニが高価で売り出されるのは、人件費もさることながら、マハジャンや販売者のコミッションが高くつくからである。そのため、ジャムダニ市場を開拓していくことは、その仕方によっては、職人たちに仕事を与える一方で、職人とマハジャン、マハジャンと販売者の、経済格差を助長してゆく結果にもなりかねない。この仕組みについて詳しく述べる前に、次節ではジャムダニの生産される場について概観する。

3. ジャムダニの生産地の概要

ここでは、ジャムダニの生産と流通について説明する前に、ジャムダニとその歴史、そしてジャムダニ生産の場について確認しておく。

1) ジャムダニとその歴史

ジャムダニ¹²とは、薄い平織りの地に地の糸よりも太い糸で縫い取り織り

した織物である。本稿で取り上げるのは、ジャムダニの中でもダカイ・ジャムダニである。NGO や BSCIC の活動で取り上げられるジャムダニも、このダカイ・ジャムダニを指している。

ダカイ・ジャムダニは手織りの布で、ダッカ・モスリン¹³の一種と言われ、古くからの伝統を受け継いだ本物のジャムダニとして名高く、その多くが高級サリーとして販売されている¹⁴。ダカイ・ジャムダニは、ダッカ近郊の村で生産されており、織りの工程が全て手作業で行われるのが特徴である。

ジャムダニは、ダッカ・モスリンと並んでムガル時代には宮廷に納められた綿織物であった¹⁵。ダッカ・モスリンは、非常に薄い良質の織物である。那須は、ムガル帝国時代のダッカ・モスリンに関する逸話を紹介しているが、それによると、ダッカ・モスリンを7枚重ねて身にまとも、身体が透けて見えるほどの薄さであったという（那須 1998 : 8）。この他にも、マッチ箱の中に一枚のサリーがおさまるほどであったとか、指輪の間をサリーが通ってしまうほどであったというように、その薄さを伝える逸話がある。

ダッカ・モスリンはイギリス植民地時代に消滅し、現在では生産されていない。博物館に展示されるサリーを見ることができのみである。

イギリス統治時代、安価なイギリス製品や西洋服への人気が高まり、結果的にイギリス政府や統治者の経済的利益をうむことになる（ビーン 1995、Tarlo 1997）。イギリス政府は 1813 年以降、自由貿易政策を押し進めていく。イギリス政府は、関税を調節することでイギリスからインドへの綿製品の輸入を促進したが¹⁶（ビーン 1995、チャンドラ 2001 他）、インド製品へ課せられた関税は、イギリスへの輸出が事実上途絶するまで高いままであった（チャンドラ 2001 : 94）。更に、イギリス本国へ持ち込まれるインド産の綿花や生糸は増加する一方であった。こうしてイギリスは原料をインドからイギリス国内へ持ち込み、加工して製品となったものを逆に輸出するというシステムを築いて、政治的にも経済的にもインドを占領していったのである。それに伴って、インドの手工業は衰退していく。その様子は、インド総督であったウィリアム・ベンティンクが 1834 年に「これほどの悲惨ぶりは商業の歴史に例を見ない。綿織物工の骨がインドの平原を白く染めている。」という言葉を残すほどであった（チャンドラ 2001 : 185）。

ダッカ・モスリンも多くの手織り物と同様に、イギリス製綿製品の流入と飢饉のために消滅した¹⁷。一方でジャムダニは生き残り、博物館で展示されるのみならず、現在でも市場に出回っている。もともと綿糸のみを使って織られたジャムダニだが、現在は、綿の他にシルクの糸が使われている。横糸と縦糸に綿糸を使ったもの、シルクのみを使用したもの、横糸に綿、縦糸にシルクを使って織ったものがある。また現在、サリー店で売られているジャムダニには、ダカイ・ジャムダニのデザインを模したミルプール・ジャムダニやタンガイル・ジャムダニがある。ミルプールは、ダッカ市内の地名である。ここで作られるミルプール・ジャムダニは、カット・ワークを施したものであるが、その薄さと幾何学的な模様が特徴である。タンガイルはダッカの北西に位置する地方都市である。タンガイル・ジャムダニは一見ダカイ・ジャムダニと似ており、綿の生地に、異なる色の横糸でデザインを縫い取り織りしたサリーであるが、これはタンガイル・サリーの一種である。横糸を一本通すたびに模様を織り込んでいくジャムダニとは違い、横糸二本に対して一本のデザイン用の糸を通していく。そのため、ダカイ・ジャムダニに比べて、製作にかかる時間が短く、できあがったサリーは目が詰んでいる。

2) ジャムダニ村の概要

バングラデシュにおけるダカイ・ジャムダニの産地とされるのは、主にナラヤンゴンジ県のループゴンジ市、ショナルガオン市、シッディルゴンジ市である。これらのジャムダニが生産される地域は、シットロッカ川のほとりから東に広がっている。この立地については、自然環境が糸つむぎと機織りに最適であると説明される。

この地域には、ジャムダニの工房の他、製糸工場や糸屋、機織り機に設置するピムに糸を取り付けてタナを作る綜績どおしの職人、またジャムダニの卸売りを請け負うマハジャンなども集中しており、「ジャムダニ・グラム(ジャムダニ村)」と呼ばれている。

BSCIC の調べによると、2002年の時点で、ジャムダニの機織り機数と労働者数は以下のとおりである¹⁸。

	ループゴンジ	ショナルガオン	シッディルゴンジ	合計
機織り機数	1717	724	78	2519
労働者数	3691	1725	253	5669

3) K村¹⁹の概要

筆者が長期滞在したジャムダニ村の一つ、K村は、人口約1000人のムスリムの集落で、現在ジャムダニ産業の最も盛んなループゴンジ市と隣り合うショナルガオン市に位置する。首都ダッカからは、バスとベビータクシーを乗り継いで約1時間半の村である。

村民の話によると、K村ではパキスタンからの独立(1971年)以後ジャムダニの工房が増え始めた。それまでは、家の軒先に設置した機織り機でジャムダニを織っており、技術習得のために村人が他のジャムダニ村に出向くことも多かったと言う。現在では、K村内に、数機の機織り機を設置して、機織り職人が働きにやってくるカルカナ(工房)が数軒ある。また、できあがったサリーを売りに出すマハジャンが登場した。K村内で、ダッカに顧客を持つ仲介者のマハジャンがあらわれたのは最近のことである。

K村は、CH村、N村、D村、C村などの村落と隣接している。これらK村以外の村落でもジャムダニは作られており、隣村から機織り職人がK村にある工房へ働きに出たり、K村の工房主が隣村の職人へ綜縞を注文したりといった繋がりが見られる。またK村には、ダッカの顧客と直接コンネクションを持つマハジャンが住んでおり、近隣の村では、このマハジャンの指示のもとに働く職人達がいる。K村を含むこの地域は、メイン・ロードから若干外れた所に立地しており、比較的まとまりのある範囲として捉えられる。

バングラデシュ統計局の報告によると、K村が属するユニオン²⁰全体では、小作に従事する世帯数は4556世帯中819世帯、次いで、ビジネスが806世帯、農耕は611世帯で、手織り業の場合は331世帯となっている²¹。筆者の調べによると、K村内では、ジャムダニ産業が主で、その従事者は約100人、ついで農業従事者²²が約20人、ジュート・ミル²³勤務者が約20人となっている。

K 村内にある機織り機数は、2004 年 2 月現在で 36 機である²⁴。機織り機には、たいてい二人が座るので、単純計算して約 80 人の機織り職人が働いているという事になる。ただし、機織り機の数には時期や所有者の資産に応じて前後している。そのため、機織り従事者の数は変動し続けていると言える。また、機織りで生計を立てる人でも、魚売りやリキシャワラーやジュート工場職員などの他の仕事を始めたり、あるいはそういった仕事から再び機織りの仕事に復帰したりするため、機織り経験者数は現在働いている職人数より多いし、機織り職人の人口を構成するメンバーは常に変化している。

K 村の中心部にはモスクとバザールがある。K 村の村民はイスラム教徒である。K 村に住む男性のほとんどはこのモスクで礼拝を行う。またバザールには、K 村だけでなく近隣の村からも、人々が食料や日用品を買い求めにやってくる。バザールには野菜や米や菓を売る店などに混じって、ジャムダニ用の糸を売る糸屋もある。

このように、K 村ではジャムダニ産業が盛んであり、糸屋、機織り職人、マハジャンというようにジャムダニの生産に必要な材料と労働力が揃っている。生産の場である K 村では、ジャムダニは基本的に自分たちで使うためのものではなく商品価値を持った布であり、ジャムダニづくりは仕事である。また筆者の K 村滞在中、バリ（屋敷地）内の女性たちが集まって古いサリーを重ねて平縫いで縫い合わせる、カンタづくりをする光景が見られた。ただし、現時点で K 村の女性たちはノクシ・カンタづくりを行ってはいない。刺繍技術は持っているものの、ノクシ・カンタ製作は行わず、カンタを作るのみである。

4. ジャムダニの生産・流通構造

ここでは、ジャムダニが生産され販売されるまでの流れを把握し、そこに関わる人々の関係を役割ごとにまとめる。ジャムダニの生産は、材料の購入、機織り機への糸の設置、織りという順で行われる。それぞれの作業は、マハジャンを介して進められている。マハジャンは生産工程に関わるだけでなく、製品を生産の場から販売の場へと運ぶ役割を担っており、ジャムダニの流通経路を握っている。以下、それぞれの工程をみてゆく。

1) ジャムダニの生産工程

ジャムダニの生産は、機織り機の設置から始まる。

以下で述べる工程のうち、①が行われる CH 村および②の NO 村は、K 村のあるユニオンと隣接する別のユニオンに属す。

①シャナ（箴）づくり：CH 村

マハジャンあるいは機織り職人は、機織り機に設置するシャナを、CH 村に住むベデ²⁵に発注する。

②糸の購入：NO 村、村の市場

機織りに使われる糸には、ジョミ（地）の部分に使う糸と、デザインを織り込むための太い糸がある。どちらの糸も、もともと綿であったが、現在は綿の他に絹が使われている。かつては、糸つむぎ専門の職人がいたと言われるが、現在は繊維工場での大量生産品と外国からの輸入品が主に出回っている。

糸は、注文を受けたマハジャンあるいは機織り職人が NO 村あるいは村の市場で購入し、ジョミ用の糸は綿糸の場合、糊付けをした後、タナづくり職人へ渡される。デザイン用の糸は糊付けをする。

③タナづくり（綜縞どおし）：K 村、N 村

タナ作りは、それを専門とする職人のもとに発注される。K 村の工房で織るジャムダニのタナは、NO 村、K 村、N 村の職人の手で用意される。K 村には、絹糸のタナ作りを専門とした職人が、N 村には綿糸のタナ作りを専門とする職人がいる。

綿糸の場合、パート（米）あるいはコイ（籾殻のまま米を砂で熱して作ったもの）のマール（糊）付けをしてからタナを用意する。

④糸の糊付け

デザイン用の糸は、それぞれの工房に持ち帰り、女性たちが米糊をつけて乾かしてからボビンに巻く。

K 村を中心に考えた時、ここまでの工程は、村内あるいは近隣の村に住む人々の関係の中で行われている。またそれぞれの作業工程は、マハジャンの注文で行われている。次に行われる工程は織りである。続いて、機織り工房

の様子について、詳しく見てゆく。

2) 村の機織り工房

K村にあるジャムダニの機織り機の所有者²⁶は、約25名である。稼動している機織り機の所有数は、ひとり1機から最高6機である²⁷。

機織り機は、バリ（屋敷地）内の工房に数機の機織り機を集めたものと、家の軒先や屋内に機織り機を設置したものとがある。機織り機の所有者は、工房あるいは機織り機が備え付けられた家の持ち主である場合が多い。その他は、マハジャンが出資して機織り機を設置した場合である。この場合、マハジャンから注文されたサリーをこの機織り機で織る。機織り機の設置費²⁸は、織り賃から引かれて、最終的には職人の持ち物となる。

①マハジャン

ジャムダニの機織り機のマリック（所有者）とマハジャンの役割は区別されるが、マハジャンが自分で機織り機や工房を所有するマリックを兼ねている場合が多い。

ジャムダニのマハジャンの仕事は、ダッカなどの都市部にあるサリー店のオーナーや、NGOの販売部門などから注文を受け、その注文どおりに機織り職人に織るよう指示したり、注文先にできあがった布を届けたりといった、受注から卸しまでのマネージメント、そして織り上がったサリーの売値の交渉、機織り職人への賃金の支払いである。これらの仕事を営むには、村内でのコネクションやマハジャンどうしのコネクションを持っていることが必要となる。

K村では、村内に住居を構える数名のマハジャンと、他村に住むマハジャンからのオーダーを工房主が受けて、サリーを織っている。マハジャンは、できあがったサリーをダッカなどの都市部にあるサリー店、NGOの販売店の他に、ムスリムの大祭イードの前にダッカ市内の広場で開かれるメラ（フェア、露天市）や、シットロッカ川の対岸にあるデムラで毎週金曜日に行われるジャムダニ・ハット（ジャムダニ市場）²⁹へ持ち込み、卸売りあるいは販売している。K村では、直接ダッカに卸売りに出向くマハジャンは二名で、両者は叔父・甥の関係にある。

K村に住むマハジャンのうち、上記のダッカにコネクションを持つマハジャンの一人に聞いたところ、彼がジャムダニの本物のマハジャンとして考える条件は、自分で出資して建てた工房があること、自分の工房だけではなく他の工房にも注文を出していること、オーダーしたサリーができあがったら、ダッカに持って行って売ること、サリーの売上で機織り職人に賃金を払っていることであった。

またマハジャンは、機織り職人に仕事の前金を渡したり、新しく仕事を習い始める人に仕事を教える環境を与えたりするという点にも留意したい。仕事を覚えようと工房にやってくるのは、主に10歳前後の子供である。彼らは、経済的問題を抱える家庭出身の子供たちである。マハジャンは、これらの見習いに仕事を与え、給料を与えたり、住まわせたりする役割も担っている。

②機織り職人

ジャムダニの機織り職人は、一般に「タンティ」または「カリゴル」と呼ばれることが多い。「タンティ」とは機織り人、「カリゴル」は職人と訳される。一部のNGOやBSCICでは、「シルピー（芸術家）」と呼ぶこともある。

K村を始めジャムダニの生産地に住む機織り職人たちは、自分たちのことを表象する特別な言葉を持っているわけではないが、「カリゴル」と呼ばれるのを好んでいる。理由として、「タンティ」という言葉には、低賃金労働者、教養の無い人という意味が潜んでいるからだと言う。しかし、実際、彼らが手にする賃金は低く、幼いころから機織りを続けているために初等教育を十分に受けていない者も多い。

機織り職人は主に男性であるが、女性の場合は幼い少女がヘルパーとして働いているか、夫や親族の男性と共に一つの機織り機に座ったり、一緒に同じ工房で働いている。

一枚のサリーを織り上げるのにかかる期間は、デザインの種類と多さによって異なるが、たいてい2週間から6週間である。機織り職人は、基本的に週に6日間働く³⁰。機織り機には、機織り職人二人が座り、自分の記憶するデザインや発注主の指定するデザインをサリーに織り込んでゆく。機織り職人のうち、一人は仕事に責任を持つ職人、もう一人はヘルパーと呼ばれる見習である³¹。経験の浅いヘルパーは、職人の仕事をサポートしながら、ジャ

ムダニ織りの技術を体得してゆく。このようにジャムダニを織る技術は、職人からヘルパーへと受け継がれており、祖父、父、息子といった具合に、世代から世代へジャムダニ織りの仕事を担ってゆく場合も珍しくない。ただし、職業を世襲しているというより、手っ取り早い現金収入源として、そこにある環境を利用している、という感が強い。

K村での調査によると、工房で働く機織り職人は、工房のマリック（所有者）の親戚や同じ村あるいは近隣の村に住む知り合いを中心に構成されている。機織り職人は多くの場合、マハジャンあるいは工房のマリックに雇われており、個人の家で織っている場合もたいていがマハジャンから注文を受け、マハジャンの手から給料をもらっている。そうでない場合は、個人的にジャムダニ・ハット（ジャムダニ市場）に売りに行く。

③機織り職人からマハジャンへ

マハジャンには、もともと卸売りや高利貸しを専門に始めた者と、以前職人として機織りをした経験を持つ者がある。調査中に出会ったジャムダニのマハジャンのほとんどは後者であった。

機織り職人からマハジャンへと転身するには、資金とコネクションが必要である。転身するには、結局、商売を始められるだけの資金を調達できることが前提になる。また、取引先に卸すサリーの材料を調達し織りの準備をするネットワークを持ち、織り上げるために機織り職人との連携をはかれなければならない。ジャムダニ・ハットやダッカで開かれるメラなどの販売の場は、コネクションづくりの機会であり、定期的な注文や大量の注文を取り付けたりする場でもある。こういった交渉の場では、自分をうまくアピールする能力と容量の良さ、物怖じしない勇気が必要である。

マハジャンとして成功すれば、雇われる側から雇う側へと立場が変わり、収入の増加が見込める。機織り職人として働く人にとって、以前は自分と同様に機織り機に座ってサリーを織った人物が、高収入を得る雇用主となったという事実は、新しいマハジャンへの嫉妬心をあおることもなる。それでも、金銭的に困難な状況で手を貸してくれるかもしれないマハジャンは頼れる存在である。また、指示どおりに働けば、比較的安定した現金収入をもたらしてくれるマハジャンには頼らざるを得ないという背景もある。

2) ジャムダニの流通経路

ジャムダニが、販売の場まで流通する経路は、マハジャンのつくるネットワークと言える。織り上がったサリーは、機織り職人から工房主へ、工房主からマハジャンへ、場合によっては更に別のマハジャンの手に渡る。K村の場合、ジャムダニは、K村内のマハジャン、あるいはジャムダニ産業が最も盛んなループゴンジ市のマハジャンを経過して販売の場へ持ち込まれる。突然の注文や、ダッカで開かれる大規模なメラの際は、マハジャンどうしのネットワークを活かし、マハジャンどうしでのサリーの売り買い、あるいは貸し借りをする。

マハジャンの手によってジャムダニが持ち込まれるのは、NGOの手工芸部門、サリー店、個人的な発注者、メラ、ジャムダニ・ハットなどである。これらのうちジャムダニ・ハット以外は、ダッカを中心とした都市部に集中している。マハジャンは、ジャムダニ村と、これらダッカの取引先との間を往復し、サリーの注文を受けたり、指定どおりに織り上がったサリーを届けたり、手持ちのサリーを売ったりする。現在、K村のマハジャンが取引している主なNGOの販売店は、クムディニとオロンノ (Aranya)³²である。また、マハジャンは、BSCICの新しいデザインの開発に協力しており、展示会に出展するためのサリーの注文も受けている。

NGOやサリー店では、マハジャンからサリーを買い、そのサリーに売値をつけて店頭で販売している。NGOやサリー店の担当者は、マハジャンからサリーを買い取る際に、新たな注文を行い、サリーのデザインと色を指定することがある。植物の葉や花の模様といったジャムダニの伝統的なデザインの大きさや組み合わせ方を指定したり、絵画的な新しいデザインを鮮やかな色の糸で織るように希望したりする。ジャムダニの機織り職人の多くは、自分達の記憶するデザインを織ることを好み、新しいデザインを織り込むことを嫌うという。ただし、K村のマハジャン二人はこういった注文に答えており、そうすることで顧客を獲得している。注文を受けたマハジャンは、受注に合った材料を調達し、機織り職人たちに注文内容を伝える。

こうしてマハジャンの手に渡ったジャムダニは、発注主のNGOやプライベートな得意先、メラなどの販売の場へと持ち込まれる。ジャムダニはバン

グラデシユ国内で販売されるだけでなく、インドや援助国など、外国へも輸出される。

5. ジャムダニの生産・流通の特徴

以上、ジャムダニの生産から販売までの流れと、それぞれの過程に関わる人々の関係を見てきた。ジャムダニの生産は、ジャムダニ村と呼ばれる村落で行われている。ジャムダニの生産は、箆づくり、綜縞どおし、織りといった工程に分業され、それぞれの工程は専門の職人たちによって行われる。K村での調査によると、一枚のサリーを仕上げるための作業はマハジャンが指定した内容に基づいて行われ、織りの工程では、マハジャンから提供される材料を使ってデザインを織り込んでいく。このように、ジャムダニの生産は、マハジャンの管理のもとで行われている。マハジャンは、ジャムダニの受注、材料の購入、工房での生産管理、できあがった製品の卸しという、生産から流通までの全ての工程を把握する。こうして織り上がったジャムダニを、マハジャンが卸す得意先の一つが NGO なのである。

五十嵐が提示するようにノクシ・カンタの生産・流通は、「パッケージ型商品生産システム」によって行われていた。ダッカにある大規模 NGO からの発注を地方の小規模 NGO が請け負い、小規模 NGO の全体管理担当者からノクシ・カンタ作りを行う農村女性に発注内容についての指示がなされる。ノクシ・カンタづくりのためのデザインと材料は、ひとまとめにして全て大規模 NGO から提供され、このデザインと材料を使ってノクシ・カンタづくりが行われる。受注から納品までの工程を把握するのは、小規模 NGO の全体管理担当者である。

ジャムダニとノクシ・カンタ、ふたつの布の流通は、プッティングアウト・システムの一形態として捉えることが可能である。ウォーターベリーによると、プッティングアウト・システムとは、企業家が、原料あるいは半加工品の供給の管理と、完成品の市場売上の管理を行うシステムで、産業資本主義の発展における「原初的産業化」の段階とも言われる（ウォーターベリー 1995:360）。また、プッティングアウト・システムは産業化の中で生き残り、自発的に再生させられることが可能であるが、その条件として、手製のある

いは半手製の品物に対する十分な消費者からの需要、経済的境遇によって労働力を安く売のを強えられる人口の存在という要素が必要となる（ウォーターベリー1995：361）。

ウォーターベリーの言う企業家を、生産と販売の仲介を行う役割と捉えると、ジャムダニの場合はマハジャンが、ノクシ・カンタの場合は小規模 NGO の管理者がその役割に相当すると考えられる。いずれも仲介者が材料を提供し、完成した製品を市場まで運ぶという点で共通している。そもそもノクシ・カンタは NGO がカンタを商品化したものであり、その生産・流通構造は、NGO がカンタを商品化する過程でつくり出したものと言える。手織りのジャムダニと手刺繍のノクシ・カンタ、これら手作りの布に対して、販売・展示の場では芸術性や伝統としての意味が強調されており、市場を拡大しようとする試みが見える。その需要を支える労働力となるのは、ジャムダニの機織り職人とノクシ・カンタの生産に関わる農村女性である。これら生産者は、低賃金で作業に従事している。

このように、ジャムダニとノクシ・カンタの生産と流通は、プッティングアウトシステムとして捉えられる点では共通している。しかし、流通における仲介者と、それぞれの生産のネットワークとの繋がりについては、大きな相違点がある。

まず、ジャムダニとノクシ・カンタの製作には、必要な道具あるいは設備に大きな違いがある。ジャムダニを織るためには、材料だけでなく、機織り機を設置するための土地と資本が必要であるという点が挙げられる。ジャムダニを織る織機には、マハジャンの出資で工房や職人の家の軒先に設置されたものが多くある。マハジャンは、職人に材料を提供するだけでなく、織機を設置するための費用を負担しているのである。ジャムダニの工房は、職人たちにとって、働く場であるだけでなく、マハジャンによって用意された環境であり、機織り技術を伝えたり習ったりする場でもある。こうしてマハジャンによって整えられた環境の中で、機織りの技術は職人から職人へと受け継がれてゆく。

そして、ジャムダニとノクシ・カンタは、プッティングアウトにおける仲介者が、それぞれの生産者ネットワークの内側にいるのか外側にいるのか、

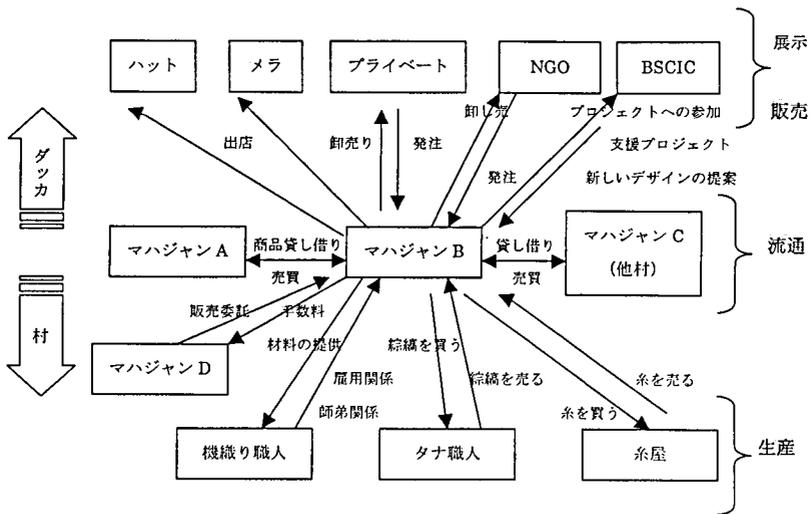
という点で異なっている。ノクシ・カンタの生産と流通における小規模 NGO の管理担当者は、新たに生産システムを組織しようとする他者である。一方 K 村において、ジャムダニのマハジャンは K 村内に住む住人である。彼らは、K 村内、あるいは近隣の村に住むマハジャンや機織り職人たちとの連携をはかりながら、一枚のサリーの生産を管理している。いわばマハジャンは、村落にいながら村落にあるジャムダニ生産に関わる人々とのネットワーク内でジャムダニの生産を管理していると言える。

また、K 村の二人のマハジャンを含む多くのジャムダニのマハジャンは、もともと機織り職人として機織りをしていたという経験を持つ。マハジャンは、自分の経験から機織り職人たちに作業指導を行うこともできるのである。また、自分が機織り職人としてジャムダニ生産に関わっていた時点からのコネクションを、マハジャンとなってからも活用していると言える。このような機織り職人からマハジャンへと転身を遂げた背景が、現在マハジャンとして働く環境をつくりだすことを手助けしているのであり、言い換えれば、村落において生産に関わる職人たちとのネットワークをより確実なものにしていると言える。

K 村の事例から見たジャムダニの生産・流通構造の特徴は、マハジャンが材料や設備を提供し、機織り職人や糸を織機に設置する職人との連携をはかることでジャムダニ生産が行われ、織り上がった布をマハジャンが販売の場へ運ぶことで生産の場と販売の場が繋がっているという点である。このようなジャムダニの生産・流通構造の特徴は、結果として、生産者ネットワーク外にある他者がマハジャン抜きに直接生産を担う機織り職人たちに接することを困難にしている。

ノクシ・カンタとは異なり、NGO がその活動に商品として、あるいは展示品としてジャムダニを取り込むことはできても、参加者として機織り職人を取り込むことが難しいのは、このような背景に起因していると考えられる。展示会やプロジェクトに参加するのはマハジャンが中心であり、機織り職人が単独で加わることは稀なのである。また、NGO が直接機織り職人からサリーを買い取ることも難しい。

BSCIC のジャムダニ・プロジェクトでは、BSCIC が整備した土地に工房



ジャムダニの生産・流通モデル図

を建てることになっているが、区画を買い取り、工房の建設費用を負うのはプロジェクトの参加者である。つまり、プロジェクトに参加するには資本が必要なのであり、それだけの資本を確保できるのはマハジャンに限られるのである。このプロジェクトは、機織り職人を視野に入れながらも結局マハジャンを対象として進められる結果となっている。

6. 小結

ージャムダニの生産・流通における NGO とマハジャンの関係ー

NGO や BSCIC といった開発援助プロジェクトを進める側が、生産者である機織り職人と直接関係を持ちにくいのは、流通経路を確保するのはマハジャンであり、そのマハジャンが村落において既存の生産者ネットワークを活かし、生産工程の管理と維持に大きく関わるとい特徴からである。

伝統技術保持者としての機織り職人の経済的地位向上を目指す開発援助側から見れば、マハジャンの存在は、活動の阻害要因と言える。しかし、それでもなお、NGO や BSCIC とマハジャンとの関係が保たれているのは、マハジャンと NGO が相互依存の関係にあるからだと考える。

NGO のジャムダニ販売活動や BSCIC のジャムダニ・プロジェクトでは、機織り職人を活動に取り込むために、マハジャンとの関係を維持せざるを得ない。また、NGO は開発援助のためだけではなく、運営資金を獲得するためにも商品としてジャムダニの流通経路を確保しておく必要がある。一方、マハジャンにとって NGO は、比較的安定した売上を保証してくれる良い顧客であり、何かあったら援助してくれるかもしれないという期待の対象でもある。また、知名度のある NGO や BSCIC との繋がりを持っていることは、他の顧客からの信用を得ることに繋がる。更に、機織り職人ではなくペプシャ（ビジネス）を担う商売人として、マハジャンのステータスを形成してゆくためには欠かせない要素でもある。こうして、本来、援助活動対象ではないマハジャンとの関係を余儀なくされた NGO と、活動の狙いとは違ったかたちで NGO との繋がりを利用しようとするマハジャンの相互関係が生じている。

最後に、ジャムダニに関係する人々の繋がりについて、より深く理解するための課題を挙げておきたい。本稿では、ジャムダニの生産と流通におけるマハジャンの役割に焦点を当てた。しかし同時に、K 村のマハジャンは、グラム・シオルカリ（村政府）のメンバーであり、ビチャール（喧嘩や揉め事の仲裁）を行う成員の一人でもある。そこで、ジャムダニ生産以外に関する村落内でのマハジャンの位置づけについて詳しく見てゆく必要がある。

次の課題は、仕事としての機織りについてである。機織り職人は主に男性で構成されており、機織りは仕事として捉えられている。技術を継承し、その技術を利用して機を織るということについて、ジェンダーや仕事観から言及できるのではないかと考える。その際、女性のノクシ・カンタブくりを参考にすることも有効だと考える。

また本稿では、資金を調達し、機織り職人からマハジャンへと転身した例を紹介した。マハジャンへ転身し、雇われる側から雇う側へと立場が変化することで、一見ステータスが上昇したように見える。ただし、マハジャンとなっても、学歴の無さに引け目を感じたり、更なるステータス上昇を目指したりする。こういった社会的ステータスを巡る葛藤と、そこにどう折り合い

をつけようとするのかについて、仕事や学歴やジェンダーという要素を組み込んで検討していきたい。

*謝辞

調査中お世話になったバングラデシュの K 村のみなさん、そして情報提供してくださった BSCIC とクムディニ・ハンディクラフトのオフィサーの方々に感謝します。本稿で紹介したノクシ・カンタの事例は、五十嵐理奈さんの調査に基づくものです。本稿の執筆に際して、五十嵐さんからは今後の研究のヒントと励ましの言葉を頂きました。この場をかりて謝意を表します。

註

¹ ジャムダニには、ダカイ・ジャムダニ、タンガイル・ジャムダニ、ミルプール・ジャムダニがある。本稿において「ジャムダニ」とはダカイ・ジャムダニを指す。ダカイ・ジャムダニは、ダッカのジャムダニという意味である。詳しくは第 3 章で後述する。

² BSCIC (Bangladesh Small and Cottage Industrial Corporation) は産業省 (Ministry of Industries) の所属機関である。1957 年、バングラデシュの家内工業の促進と発展を目的として設立された。

³ 本稿で扱うジャムダニの生産と流通に関する資料は、2002 年 9 月から 2004 年 3 月までのバングラデシュ滞在中に得たものである。

⁴ マイクロクレジットは、無担保小規模ローンとも呼ばれ、無担保でローンの貸付を行う経済援助活動である。マイクロクレジットは、グラミン銀行の取り組みから始まり、ブラック (BRAC) やプロシカ (Proshika) などの大規模 NGO も活動に取り入れているなど、現在では多くの NGO が手がけている。

⁵ ブラックは 1972 年の設立。設立当初は外国援助に頼っていたが、2001 年度には 78% を自己財源でまかなっている (下沢 2004 : 268)。

⁶ “textile traditions of Bangladesh” は、ダッカ市内のギャラリーで 2003 年 10 月に開催された。Aarong、Aranya、Concern、Corr The Jute Works、Ishita、Kumudini、Prabartana、Pubali Mills、Shilleikon、Sonali Mills、Swapan、Tangail Sarikutir の共催である。これらは、バングラデシュの現地 NGO、リサーチセンター、プライベートのサリー店などである。また、2002 年には、政府機関 BSCIC において “Jamdani Exhibition” が行われた。

⁷ ブラックの販売店アーロンの店頭で配られる説明書きには、ジャムダニは

「カリゴル (職人)」、「weaver」あるいは「artisan」によって織られるものであり、ノクシ・カンタは「モヒラ (女性)」「women」が作るものとある。⁸ 「ノクシ・カンタ (nakshi kantha)」はベンガル語である。「ノクジ」は「模様をついた」を意味し、「カンタ」は「刺し子の布」を意味する (五十嵐 2002 : 60)。

⁹ 五十嵐は、この定義の他に、古くなった布を重ねて平縫いしたものをカンタ、模様を施されたものをノクシ・カンタとする定義があることにも触れている (五十嵐 2002 : 69)

¹⁰ 表記については、(五十嵐 2002) に従った。

¹¹ このプロジェクトは、いくつかの問題を含んでいる。第一にプロジェクト・エリアに工房を建てる可能性を持つのは結局、資金のあるマハジャンであることである。また、工房をこのエリアに建てたとしても、住居が遠くにある場合、職人たちは毎日通うのが困難であることも挙げられる。

¹² 那須によると、「ジャムダニ (Jamdani)」は「花」のメタファーとされた。ペルシャ語の「花飾り (jam-dar)」や「錦織 (jamewa)」という語から派生したという (那須 1998 : 8)。またモハド・サイドゥールも同様に、ジャムダニという名がペルシャ語を起源としていると考えるが、その意味については「アルコールなどを入れる容器」と説明している (Sayeedur1993 : 12)。ジャムダニ織りの起源について、語源と同じくペルシャを起源とする見方があるが、リントン (Lynton) はこの説を批判している。彼女は、ジャムダニの起源は不明であると述べ、機織り機の形態や染織語彙のペルシャ語化を考慮に入れた上で、ジャムダニはペルシャやムスリムの染織技術が導入される以前から存在していたと仮定している (Lynton1995 : 45)。

¹³ ダッカ・モスリンの「ダッカ」は英語表記に由来する。ダカイ・ジャムダニと言うようにベンガル語では「ダッカの」という意味をダカイとも表現するが、ここでは名称が定着している「ダッカ・モスリン」と表記した。

¹⁴ サリーの値段には幅がある。例えば使用人の女性が日常的に着る綿製サリーは約 200 タカからあるし、良質のシルク・サリーや細かい刺繍入りのサリーは数千タカ、時には数万タカで売られている。ジャムダニ・サリーの値段はデザインの多さと質によるが、1000 タカ前後から 10000 タカ前後である。中には数万タカのジャムダニ・サリーもあると聞く。(1 タカ≒2.2 円)

¹⁵ ダッカ・モスリンは、良質の綿で織られた薄い織物で、ムガール宮廷においては、神の力をあらわす「光 (ペルシャ語 : nur)」と重ねて考えられた。一方ジャムダニは「花」のメタファーとされた (那須 1998 : 8)。

¹⁶ ビバン・チャンドラの例によると、1824 年のインド製のキャラコには

68.5%、モスリンには37.5%の関税がかけられていた（チャンドラ 2001 : 94-95）。他にも、イギリスに輸出されたインド製の砂糖に対する関税は、原価の三倍以上であったという（チャンドラ 2001 : 95）。

17 1776年、ダッカには25000人の職工とその綿布用の糸を紡ぐ80000人の紡ぎ手がいたが、1787～88年の飢饉で多くの紡ぎ手は餓死した。1818年にはダッカの工房が閉鎖され、1821年にはイギリス製綿糸がベンガルへ輸入され始めた（那須 1998 : 10）。

18 2002 “*Jamdani tat shilpo jorip*” より。このレポートは、BSCICのジャムダニ発展プロジェクトを進める目的で実施された調査結果をまとめたものである。

19 ここでは、「村」という単位を、行政区「グラム」として扱う。

20 バングラデシュの行政区。行政単位は、ジラ（県）、ウポジラ（市郡）、ユニオン、グラム（村落）の順に狭まる。複数のグラムで一つのユニオンが構成される。

21 Bangladesh Bureau of Statistics 1993 “Bangladesh Population Census 1991 Narayanganj” より

22 農業で生計を立てている者に限って記載した。

23 デムラにはアトム・ジュート・ミルやコリム・ジュート・ミルなど、政府の運営するジュート・ミルがある。ジャムダニを織る賃金よりも高く、比較的安定した収入を得られるという理由から、働きに出る村人も多い。これらの工場のうち、K村では1958年（勤務者談）に創設されたコリム・ジュート・ミルに通う村人が大半である。コリム・ジュート・ミルに長年勤めるある村人の収入は現在月給約3000タカである。（1タカ≒約2.2円）

24 BSCICの調べによると、2002年の時点で、K村内にある操作可能な機織り機は48機。

25 船上生活者。CH村では、定住したベダがコミュニティーを形成して生活している。

26 ここで言う「所有」とは、機織り機の設置費を出資したことに由来する場合に限る。

27 機織り機の数は、注文状況や所有者の経済状況などによって左右する。また、ジャムダニを織る機織り機の構造は、他の機織り機に比べると単純で、くずしたり運んだり再び設置したりしやすいということもある。

28 ジャムダニの機織り機を設置するためにかかる費用は5000タカ前後（1タカ≒約2.2円）である。

29 ジャムダニ・ハットは、マハジャンだけではなく機織り職人にとっても、

サリーを販売する機会である。機織り職人が個人的にハットに参加する場合、マハジャンからの注文ではなく自分で織ったサリーを販売する。

³⁰ 一週間のうち金曜日が休日にあたる。機織り職人たちの一日の仕事は、朝6時ころから18時ころまでである。途中、朝食と昼食兼水浴びのための休憩がある。また、断食期間中には、ムスリムの大祭イード前にサリーを仕上げるため、朝のアザーンから夜のアザーンまで残業することもある。

³¹ 職人とヘルパーの賃金は異なる。カリゴルの賃金は一週間6日働いて約500タカ、ヘルパーは約250～300タカである。サリーが織り上がった時点で、そのサリーを織るのに要した労働時間とサリーの売値に合わせて賃金が加算される。(1タカ≒約2.2円)

³² オロンノ (Aranya) は1982年に設立された。設立当初はBSCICの調査やプロジェクトを担う機関であった。現在はNGO資本に変わり、複数のNGOや手工芸品を扱う企業から集めた製品を販売している。特に草木染め製品の生産促進や販売に力を入れている。

参考文献

Bangladesh Bureau of Statistics

1993 “Bangladesh Population Census 1991 Narayangonj”

Bangladesh Rural Advancement Committee

1981 *Jamdani—Figured Muslims of Dhaka—* : BRAC Printers

Bangladesh Small and Cottage Industrial Corporation (BSCIC)

2002 *Jamdani tat shilpo jorip* (ベンガル語)

Bari, Fazlul

1983 *Jamdani Legacy Being Lost?*

Serajul Islam Choudury ed. *Tbdy* vol1 Issue6 Take7 : Today publication

ビーン,スーザン・S

1995 「ガンディーと『カーディ』、インド独立の織り成し」

アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュナイダー編『布と人間』

佐野敏行訳 ドメス出版

Began, Mahamuda

1991 Jamdani silpa *Silpakala* : Bangladesh Silpakala Academy
チャンドラ,ピパン

2001『近代インドの歴史』粟谷利江訳 山川出版社
コーン,バーナード・S

1995「布、服、そして植民地主義——19世紀のインド」
アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュナイダー編『布と人間』
佐野敏行訳 ドメス出版

藤田真理子

1995「布の生産と『伝統』の創出—奈良晒保存・伝承活動をめぐるジェン
ダー・世代・カー」『地域文化研究』広島大学総合科学部紀要
第21巻

Ghuznavi, Sayyada R

1981 *NAKSHA A Collection of Designs of Bangladesh*
: Bangladesh Small and Cottage Industries Corporation

Glassie, Henry

2000 *Traditional Art of Dhaka* Dhaka : Bangla Academy

五十嵐理奈

2000「カンタからノクシ・カンタへ」福岡アジア美術館編 [2001]

2002「開発援助 NGO によるパッケージ型商品生産
—バングラデシュにおける刺繍布製品ノクシ・カンタの誕生—」
東京女子大学社会学会紀要『経済と社会』第30号

2004 (2003)「女性の技術が支える NGO アート—カンタとノクシ・カン
ター」大橋正明、村山真弓編著『バングラデシュを知るための 60
章』明石書店

Lynton, Linda

1995 *THE SARI styles~patterns~history~techniques*
London : Thames and Hudson Ltd

村上勇、福田浩子編

1996『アジアの染織展』広島県立美術館

村山真弓

1998 「バングラデシュにおける援助の社会・政治的意味」

佐藤寛編『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』
アジア経済研究所

那須久代

1998 「ダッカ・モスリン—細い糸の布—」『遡河』第9号 遡河編集部発行

大橋正明、村山真弓 編著

2004 (2003) 『バングラデシュを知るための60章』明石書店

長田満江

1998 「バングラデシュ経済と開発援助」

佐藤寛編『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』
アジア経済研究所

佐藤寛

1998 「援助の実験場としてのバングラデシュ」

佐藤寛編『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』
アジア経済研究所

佐藤寛編

1998 『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』アジア経済
研究所

Sayeedur, Mohammad

1993 *Jamdani* (ベンガル語) Dhaka : Bangla Academy

下村奈保子

1998 「バングラデシュにおける青年海外協力隊の限界と可能性」

佐藤寛編『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』
アジア経済研究所

下沢嶽

1998 「バングラデシュの NGO の現状」

佐藤寛編『経済協力シリーズ 183 「開発援助とバングラデシュ」』
アジア経済研究所

2004 (2003) 「アジア—巨大な NGO—巨大 NGO、BRAC—」

大橋正明、村山真弓 編著『バングラデシュを知るための 60 章』
明石書店

臼田雅之・佐藤宏・谷口晋吉編

1999 (1993) 『もっと知りたいバングラデシュ』 弘文堂

Tarlo ,Emma

1996 *CLOTHING MATTERS dress and identity in India*
: The University of Chicago Press

ウォーターベリー,ロナルド

1995 「旅行者のための刺繍—メキシコ・オアハカにおける現代のプッティ
ングアウトシステム—」 アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュ
ナイダー編『布と人間』佐野敏行訳 ドメス出版

ワイナー,アネット・B、シュナイダー,ジェーン編

1995 『布と人間』佐野敏行訳 ドメス出版

(nahokookada@hotmail.com)